

年間第四主日
(ルカ 4:21-30)

2013年2月3日
イエズス会司祭 小暮康久

『預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ』…。イエス様がご自分の故郷であるナザレで人々に受け入れられなかったというこのエピソードは、それぞれの福音書の中で、置かれている場所は異なっていますが、マタイ、マルコ、ルカの共観福音書が共通に記すものです。神の国の福音を告げ知らせるイエス様が故郷で受け入れられなかった、それを三つの共観福音書がしっかりと記している、そこには何か大切なメッセージがあるように思います。今日はこの点について、皆さんとご一緒に味わってみたいと思います。

『預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ』というこの言葉は、どのような状況において語られたものだったのでしょうか。イエス様は、故郷のナザレに来た時、安息日に会堂に入られ、手渡された預言者イザヤの書を朗読します。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

そして、注視する人々の前で「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言されたのです。それは、まさにご自分が油注がれた者、つまりメシアであり、福音を告げ知らせるために御父から派遣されたということの宣言でした。

この宣言を目の当たりにした人々の最初の反応は、「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いた」というものでした。ナザレの人々が、イエス様の姿と言葉に触れて「驚いた」ことは、マタイ、マルコも共通に記しています。

ナザレの人々は、最初に「驚いた」のです。それは、人々がイエス様の姿と言葉の中に「驚き」に値するような特別な何かを見たからです。見たことのないような、出会ったことのないような何かをイエス様の姿と言葉の中に見て「驚いた」のです。

「驚き」ということについてちょっと考えてみたいと思います。卑近な例ですが、例えば、遊園地の「お化け屋敷」では怖がらない人でも、誰もいないはずの場所で、後ろから突然、肩をたたかれば心臓が止まりそうになるほど驚くはずですが。遊園地の「お化け屋敷」で驚くことがないのは、そこで起こることがすべてその人の理解の想定内だからです。大人はだいたい遊園地の「お化け屋敷」というものがどういうものであるのか、経験上よく知っているからです。しかし、誰もいないはずの場所で、後ろから突然、肩をたたかれることは、その人の理解の想定を超えた出来事です。だからそのような出来事に遭遇した時、たとえ大人であっても、人は「驚く」のです。自分の理解の想定を超えたものに出くわした時、人は驚

くのです。「驚く」ということは自分自身で作りだすことは出来ません。ですから、逆に言えば、人が「驚き」を体験している時、間違いなく、それはその人が、その人の理解の想定を超えた出来事、新しい何かに出会っているのです。「驚き」はその「しるし」でもありません。

しかし同時に、「驚き」の体験というのは、ある意味で、それまで自分が慣れ親しんだ安定した理解の地平を揺るがすものでもあります。だからある人々は、その「驚き」の原因となっているものを、なんとかこれまでの自分の理解の地平に引きずり下して解釈しなそう、そうすることによって、再び自分の理解の地平を安定したものにしようとします。

それが、ナザレの人々の「驚き」の後の反応です。人々は、間髪いれずに「この人はヨセフの子ではないか。」と口にします。この人々の反応もマタイ、マルコが共通に記すものです。

イエス様の姿と言葉の中に、自分たちの理解の想定を超えた「驚き」に値するような特別な何か、見たことのないような、出会ったことのないような全く新しい何かに一瞬出会っているのです。それはイエス様の中にある「神の子の権威」です。それにも関わらず、その「驚き」に留まることが出来ずに、直に「目の前のイエスは、大工の子、ヨセフの子なんだ」という、自分たちが慣れ親しんだ安定した理解の地平にイエス様を引きずり下してしまったのです。この心の動きは、子どもの頃からイエス様を知っていたナザレの人々であるからこそ、より強く働いたと言えます。「だって私はこの男をよく知っているのだから」と。

預言者が自分の故郷で歓迎されないのはそのためです。旧約聖書の預言者も、生まれた時から預言者であったわけではありません。ある時に、その人に「神の言葉」が臨んで、その時から預言者となるのです。預言者の預言とは、「神の言葉」を預かっているという意味であって、いわゆる世間でよく言われるようなノストラダムスの「予言」などとは根本的に異なります。預言者の預言は、必ず「主はこう言われる」という言葉で始まります。これは「預言者の定式」とか「使者定式」と呼ばれるものです。元々は「主人の言葉」を預かった使者の定式から来ています。つまりここでの使者とはメッセンジャーのことです。ここで大切なのは、「主人の言葉」、「主人のメッセージ」であり、メッセンジャー本人ではありません。預言者の本質も同じです。大切なのは「主の言葉」です。預言者はその「主の言葉」を人々に告げるために主から遣わされた使者、メッセンジャーなのです。

しかし、この預言者に対して、預言者の故郷の人々は、「あれは、この前まで羊飼いだっただじゃないか、農夫だっただじゃないか」といって、預言者が告げる「主の言葉」ではなく、それを語っている預言者本人のほうに目を向けようとするのです。なぜなら、「主の言葉」は、人々に生活の回心を求めるような、言い換えれば、人々の日常を、その慣れ親しんだ安定した理解の地平を揺るがすものだからです。だから、「主の言葉」から目を背けるために、その言葉を語る預言者を、自分たちの安定した理解の地平にまで引きずり下して理解しようとするのです。この前まで羊飼いだっただ、農夫だっただあの男の言葉が「主の言葉」であるわ

けがないと…。

未知のものに出会った時、自分の理解の地平を揺るがすものに出会った時のこの心の動きは、人間にとってとても強いものです。何故なら、人間の深いところには、「自己中心」という心の傾きがあるからです。たとえ神からの呼びかけがあっても、頑なにそれを拒み、あくまでも「自己中心」の世界の中に引き籠ろうとする傾向が人間の深いところにはあるからです。

しかし、これとは対照的な態度を示す人が聖書に描かれています。マリア様です。ルカは、少年イエスが神殿に留まったあの出来事について詳細に記しています。十二歳になった少年イエスと両親は祭りの慣習に従って都に上ります。しかし、祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスがそこにいないことに両親は気づきます。必死に親類や知人の間を捜し回ったが、見つからず、捜しながらエルサレムに引き返すと、神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしている少年イエスを見つけます。聞いている人々は皆、少年イエスの賢い受け答えに驚いていたのです。両親はイエスを見て驚き、マリア様は思わず言うのです。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」母親として当然の言葉です。しかし、少年イエスはマリア様にこう答えたのです。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」ルカは簡潔に記します。「両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。」と。

きっとマリア様も驚いたはずですが、少年イエスの言葉は、マリア様の理解の想定を超えたものであったからです。「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だ」という息子の言葉は、母として慣れ親しんできた安定した理解の地平を揺るがすものだったかです。それは十分に「驚き」に値する言葉でした。

しかし、そこからのマリア様の反応が、今日の福音に登場するナザレの故郷の人々の反応とは違うのです。マリア様は、自分の理解の想定を超えた出来事に直面した時、その出来事を人間的な理解の地平に引きずり下し、否定するのではなく、それを分からないまま、心に納めて思い返し続けるのです。ルカは簡潔に記します。「母はこれらのことをすべて心に納めていた。」と。

私たちも、信仰者として生きていく時、人生の中で、自分の理解の想定を超えた出来事に直面することがあります。「何故、こんなことが起こるのか」「どうして私に…」という出来事に直面することがあるでしょう。それは多くの場合、それまで自分が慣れ親しんできた安定した理解の地平を揺るがす出来事であるはずですが、そんな時、私たちには二つの態度の選択の道があります。

一つは、今日の福音に登場するナザレの故郷の人々のように、その出来事を「自己中心」の、自分の理解の地平で解釈しようとする態度です。「あれが原因で…」とか「あの人が原因で…」とかの人間的な理由を見つけて、悲しんだり、怒ったりするという態度です。

しかし、もう一つは、マリア様のように、その出来事を神様の御前で受け止めるという態

度です。分からない、だけどそれを神様の御前で、分からないままに心に納め、思い返し続ける、祈り続けるという態度です。神様に心を開き続けている態度とも言えます。信仰者の道とは、このマリア様の態度を生きていく道です。そこにこそ神秘へと開かれた、私たちの信仰者の道があるのです。

『預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ』これが人間の深いところにある「自己中心」の傾きを示すものであるとしたなら、それを超えて行く態度を、聖書は、そしてマリア様は私たちに示してくれているのです。私たち信仰者が、人生の中で、自分の理解の想定を超えた出来事、ある意味で試練に出会った時、私たちが思い出すべきはマリア様の姿です。私たちがマリア様の態度をもってその出来事を受け止める時、マリア様は私たちを支え、御子の神秘と出会う道へ導いて下さるでしょう。

この御ミサを通して、私たちも、信仰者の模範であるマリア様のように、神様に心を開き続ける態度を生きていくことが出来るように、その恵みを願って参りましょう。